

# 「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う教育の創造

## － 協働的問題解決ができる子どもの育成をめざして －

### I はじめに

平成 26 年 8 月豪雨による広島土砂災害は、直接被害を受けた方々はもちろん、我々も大きな衝撃を受けることになった。こうした未曾有の災害からの復興に向け、我々は、一人ひとりが相互に協力するとともに、科学的知識を適切に習得し、積極的に民主社会に参加する態度をもつことが必要であることを強く認識させられた。図 1 は、50 年先までの我が国における 15～64 歳の人口推計である（国立社会保障・人口問題研究所，2012）。日本の 15～64 歳の人口が 50 年後にほぼ半減することを考えると、現在以上に外国人労働者に頼る未来が予想され、国内でも外国の方々と協働して豊かな生活を創りあげることが必要になる。

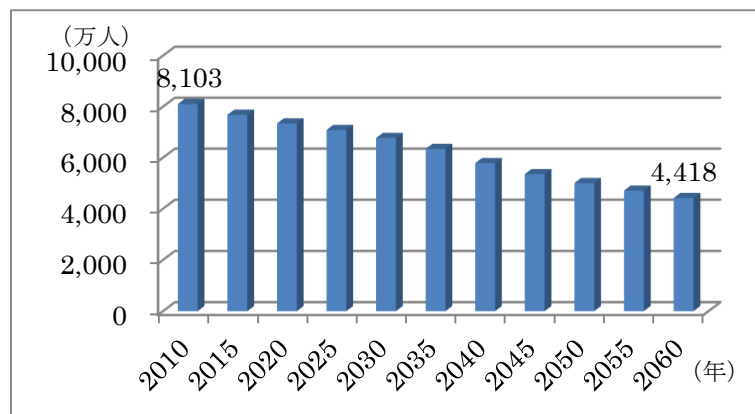


図 1 日本の将来推計人口（15～64 歳）

また、環境に配慮した新エネルギーの開発などを考えてみても、世界各国・各地域において共通認識を図ったうえで行動するほかに解決の道がないことに気づかされる。これらのように、我々を取り巻く諸課題の解決に向けて必要とされる他者との協働、適切な知識の習得、民主社会に参画する態度は国内外を問わず、つまり地球規模で育成すべき資質・能力であろう。まさに、我々はグローバル時代に生きているのである。

---

#### ～主題「グローバル時代をきりひらく資質・能力」について

「グローバル時代」とは、ますますグローバル化が加速している昨今のことを示している。国家戦略室のグローバル人材育成推進会議（2012）によると、「グローバル化」とは、情報通信・交通手段等の飛躍的な技術革新を背景として、政治・経済・社会等あらゆる分野でヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて高速移動し、金融や物流の市場のみならず人口、環境、エネルギー、公衆衛生等の諸課題への対応に至るまで、全地球的規模で捉えることが不可欠となった時代状況を指すとしている。

#### ～副題「協働的問題解決」について

「協働的 (collaborative) 問題解決」とは、“OECD:PISA 2015 draft collaborative problem solving framework, 2013, p 6”によると、2人以上の行為者が解に迫るために必要な理解と努力を共有し、解にいたるための必要な知識とスキル、労力を出し合うことによって問題を解決しようと試みることにしている。本校では「共同 (common)」を、2人以上の行為者が力を合わせることにして捉え、「協働 (collaboration)」は、知識を学習者全体で構築することを重視する場合の用語であり、「協同 (cooperation)」は、知識を個人で構築することを重視する場合の用語と捉えている（溝上，2014などを参照）。本校では学校教育における集団での学びを研究の対象としているから、「協働 (collaboration)」の用語を使っている。

以上のような状況のもと、学校教育においては、例えば次のような動きがある。中央教育審議会は、グローバル化する社会状況をふまえ、平成 26 年 12 月に大学入試について、センター試験を廃止して思考力・判断力・表現力を中心に評価する新テストの導入について答申した。また、広島県教育委員会は、平成 26 年 12 月に、平成 30 年度より小・中学校において外国人（ALT 等）と共同生活するグローバル・キャンプを導入するなどのアクション・プランを提案した。これらの動きは、グローバル化する社会状況に対応した新たな教育の試みである。グローバル時代をきりひらくための教育改革は、学校教育に携わる我々にとって喫緊の課題といえよう。

広島大学附属東雲小学校では、平成 25、26 年度に ESD に関する研究（国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業）及びインクルーシブ教育に関する研究（インクルーシブ教育システム構築モデルスクール事業）を行い、グローバル化する社会に生きる主人公として学び育つ人間の育成を標榜した実践的研究を進め、ユネスコスクールに認証されている。また、東雲中学校では、平成 13 年度より始められた姉妹提携校との国際交流活動を契機として、平成 25、26 年度に姉妹提携校 3 校との国際交流と修学旅行までの 3 年間の Mission－Research システムとを統合した総合的な学習の時間におけるカリキュラムを設計し実践してきた（広島大学附属学校園研究推進委員会報告書、2015）。さらに、東雲小学校と東雲中学校は平成 22 年度より、「小・中学校 9 年間の学びがつながる授業づくりのあり方」を研究主題として、小・中学校教員が協働して実践的研究を行ってきた。各教科、特別支援教育、学校保健、食育について得た知見は、平成 26 年度に、東雲授業づくりプランとして提案した（広島大学附属東雲小学校・東雲中学校、2014）。東雲小学校と東雲中学校で協働して研究を進める基盤は整っている。

## Ⅱ グローバル時代をきりひらく資質・能力

本節では、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成するために求められる方向性について、先行研究を概観することを通して、知見を得る。

### 1 5つの提言

#### （1）OECD（経済協力開発機構）

OECDは、「Definition and Selection of Competencies (DeSeCo: コンピテンシーの定義と選択)」において、学力の国際標準としてのキー・コンピテンシーを、次のように示している（ライチェン、サルガニク、2006）。

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力
- ② 異質な集団で交流する力
- ③ 自律的に活動する力

#### （2）国際教育推進検討会

初等中等教育における国際教育推進検討会は、「国際社会を生きる人材を育成するために」において、すべての子どもたちに国際社会で求められる態度・能力を、次のように報告している（初等中等教育における国際教育推進検討会、2005）。

- ① 異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力
- ② 自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立
- ③ 自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力

### (3) ATC21S (欧米の政府・大学・産業界による国際プロジェクト)

ATC21S (Assessment and Teaching of 21st Century Skills Project) は、21 世紀の社会で働くために必要な力を、次の4つに分類している(グリフィン、マクゴー、ケア、2014)。

- ① 思考の方法 — 創造性とイノベーション, 批判的思考・問題解決・意思決定,  
学び方の学習/メタ認知
- ② 働く方法 — コミュニケーション, コラボレーション (チームワーク)
- ③ 働くためのツール — 情報リテラシー, ICTリテラシー
- ④ 世界の中で生きる — 地域とグローバルのよい市民であること (シチズンシップ),  
人生とキャリア発達, 個人の責任と社会的責任 (異文化理解と  
異文化適応能力を含む)

### (4) グローバル人材育成推進会議

国家戦略室のグローバル人材育成推進会議は、「グローバル人材育成戦略」において、我が国がこれからのグローバル化社会で育成すべき人材として、次の要素を示している(グローバル人材育成推進会議、2012)。

- ① 語学力・コミュニケーション能力
- ② 主体性・積極性, チャレンジ精神, 協調性・柔軟性, 責任感・使命感
- ③ 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

### (5) 国立教育政策研究所

国立教育政策研究所は、「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」において、21 世紀をきりひらく力をもった市民として日本人に求められる能力を、21 世紀型能力として次のように示している(国立教育政策研究所、2013)。

- ① 実践力 — 自律的活動力, 人間関係形成力, 社会参画力, 持続可能な未来づくりへの責任
- ② 思考力 — 問題解決・発見力・創造力, 論理的・批判的思考力, メタ認知・適応的学習力
- ③ 基礎力 — 言語スキル, 数量スキル, 情報スキル

## 2 グローバル時代を意識した研究先進校の取り組み

### (1) 東京学芸大学附属国際中等教育学校

東京学芸大学附属国際中等教育学校は、International Baccalaureate Organization (国際バカロレア機構) の認定校として、国際的な中等教育課程(MYP) の考えをもとに、特設学習「国際教養」やイメージョン授業など特色ある教育活動を展開している(平成27年1月に本校教員が視察)。また、多様で異なる人々と共生・共存でき、進展する内外の国際化の中で活躍する力をもった生徒を育てることをめざして、具体的に次の4つの力を育てようとしている(東京学芸大学附属国際中等教育学校、2014)。

- ① 現代的な課題を読み解く力
- ② 知識とイメージを自分で再構成する力
- ③ 対話を通して人との関係を作り出す力
- ④ 異文化への寛容性と耐性

## (2) 神戸大学附属中等教育学校

神戸大学附属中等教育学校は、平成 22 年度より「グローバルキャリア人を育成する授業の創造」を研究主題に掲げ、平成 26 年度は、グローバルキャリア人の各教科における構成要素を提示した実践研究を行っている（平成 27 年 3 月に本校教員が視察）。また、国際的視野をもち、未来を切り拓く生徒を育てる学校づくりをめざして、具体的に次の 3 つの力を育てようとしている（神戸大学附属中等教育学校, 2014）。

- ① 主体的に自己の未来を切り拓くことのできる力
- ② 国際的な視野を持ち、自他を認め合って行動できる力
- ③ 文化を創造する実践力

## (3) 広島大学附属小学校

広島大学附属小学校は、平成 26 年度より「グローバル化社会を生き抜く子どもの育成」を研究主題に掲げ、グローバル化社会において各教科で育成すべき資質・能力を、国語科は読書リテラシー、社会科は社会形成力、算数科は数学的な考え方、理科は科学的リテラシー、造形科は創造的想像力、体育科は他者理解の力、英語科はコミュニケーション能力と定めて実践研究を行っている（平成 27 年 2 月の研究会に本校教員が参加）。また、ユネスコスクールとして大学のステークホルダーと連携し、グローバルに活躍する児童を育てる学校づくりをめざしている（広島大学附属小学校, 2015）。

## 3 グローバル時代をきりひらく資質・能力

### (1) めざす子ども像

東雲小学校・東雲中学校は、9 年間の教育の積み重ね、つまり、中学校卒業時にめざす子ども像を「共生社会をたくましく生き抜く人間力豊かな子ども」と設定し、そのために必要な力を、次の 3 つとしている（広島大学附属東雲小学校・東雲中学校, 2014）。

- ① 多元的価値観を受容する力  
社会の中で自分のよさを大切にし、  
お互いの違いを違いとして認めながら共に高め合う力
- ② 表現・コミュニケーション力  
様々な情報や意思、思想、態度等を正しく理解し受けとめ、  
さらに自分の意見を論理的に伝える双方向的なコミュニケーション力
- ③ 意思決定力  
課題が何かを的確に判断し、  
いくつかの解決方法案を考え、選択・決定する力

### (2) 「グローバル時代をきりひらく資質・能力」の定義

東雲小学校・東雲中学校が掲げている9年間でめざす子ども像に必要な力と、上述した先行研究を照らしあわせてみると、①多様性、②協働性、③主体性のいずれも重なる内容であることがわかる。そこで本校では、これら3つの要素が学びの過程として現れる姿を想定しながら、グローバル時代をきりひろく資質・能力を、「さまざまな文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義する。

### （3）「グローバル時代をきりひろく資質・能力」を育成する視点

「グローバル時代をきりひろく資質・能力」を育成する視点について、まず、東雲小・中学校の教員でブレインストーミングを行った（図2）。



図2 東雲小・中学校の教員による協議の様子（平成27年2月24日）

次に、東雲小・中学校研究代表者会で、そこで出されたアイデアをまとめ、分類した。そのねらいは、主題へ迫るために東雲小・中学校独自のアプローチ方法を模索するためである。その結果、次のことが導出された。

- ・これまでに東雲小・中学校で推進してきた小中連携の研究が基盤になる。実際、平成26年度には、東雲授業づくりプランを提案した（東雲小学校・東雲中学校，2014）。
- ・本校ではこれまで、ESDやインクルーシブの研究、ICTや英会話などの研修、たてわり（クラスター）活動、小学校における教室めぐりや座談会などの活動、中学校における姉妹提携校との国際交流や修学旅行を活用したResearch活動など、グローバル時代をきりひろく資質・能力を培う教育活動を多面的に展開してきている。
- ・グローバル時代をきりひろく資質・能力の要素に①多様性、②協働性、③主体性がある。
- ・各教科、特別支援教育、学校保健で「協働的問題解決」を生起させる授業づくりに取り組めば、子どもの①多様性、②協働性、③主体性の育成がこれまで以上に期待できる。
- ・協働的問題解決を生起させる授業づくりの視点は、本校の複式学級をはじめ、現在実践されている授業からも見いだすことができる。

---

～「グローバル時代をきりひろく資質・能力」の定義について

「資質・能力」とは、国立教育政策研究所（2013）によると、「スキル」より長期的かつ領域普遍的な「知識」や「技能」等の総体としている。広辞苑によると、「資質」とは、うまれつきの性質や才能であり、「能力」とは、物事をなし得るはたらきである。本校では「力」を、資質・能力の総体として捉え、資質は能力の基盤となる部分と捉えている。

### （4）本研究の意義

本研究の意義について主たるところとして、次の3つをあげる。

第一に、研究の「新規性」である。東雲小学校と東雲中学校の9年間、すなわち初等・中等教育を見通して取り組もうとするところである。また、本研究における「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する視点は、いわゆる英語力のみに限定していない。我々が考える研究の視点は、例えば、一人ひとりがわかっていることをもち寄り、全員の見方や考え方を積極的に取捨選択することを繰り返して、はじめより納得できる解に到達すること（グリフィン、マクゴー、ケア、2014）をめざす協働型の問題解決の視点や、ATC21S（2014）が提唱するICTリテラシーの視点などを統合したアプローチである。

第二に、研究の「有用性」である。本研究では、変革の主体を教育課程ではなく、教師の意識にしている。したがって、現行の教育課程のままで研究を進める。そのため、地域の教育モデルの拠点校として、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業のあり方について、日々の実践レベルで提供できる。教師の意識改革があってはじめて、子どもの「グローバル時代をきりひらく資質・能力」の育成が可能だと考える。

第三に、研究から「期待される効果」である。「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成するアプローチ方法とその結果を東雲小学校と東雲中学校で連携し、児童や生徒のそれぞれの発達段階に応じた教育施策についての有益なデータを提供できる。

### Ⅲ 研究の目的及び方針

#### 1 研究の目的

本研究の目的は、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業のあり方について実践研究を進め、地域の教育モデルの拠点校として、日々の実践レベルでの提言をすることである。研究は4年計画で進める。初年度である今年度の重点は、次の2点とする。

- （1）各教科、特別支援教育、学校保健において、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業を実践的に模索する。
- （2）小・中学校全体として、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業づくりの視点および評価の観点を提案する。

#### 2 年次計画

**1年目：「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業の模索**

- （1）授業交流や講話などの授業研修会などをもとにして、各教科、特別支援教育、学校保健における指導のアプローチを明確にしたうえで、授業を実践する。また、研究の進捗状況を東雲教育研究会で明らかにする。
- （2）2つのワーキング体制で研究を進める。

〔ワーキングⅠ〕

「授業づくりの視点」チームは、文献や各諸国の教育現況、本校における各教科、特別支援教育、学校保健の指導方針をふまえて、「東雲授業づくりプランの視点」を提案する。

〔ワーキングⅡ〕

「子どもの実態」チームは、心理学や教育理論、本校における児童や生徒の実態をふまえて、「グローバル時代をきりひらく資質・能力についての児童・生徒実態調査」計画を立てる。

### 2年目：「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業の検証

- (1) 東雲授業づくりプランの視点及び各教科、特別支援教育、学校保健における指導方針にもとづいた授業を実践する。また、授業の有効性についての進捗状況を東雲教育研究会で明らかにする。
- (2) グローバル時代をきりひらく資質・能力についての児童・生徒実態調査計画にもとづいて、実態調査を実施する。

### 3年目：「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業の発信

- (1) 各教科、特別支援教育、学校保健においてグローバル時代をきりひらく資質・能力を育成する小・中学校の学びプランを明確にする。また、その有効性についての進捗状況を東雲教育研究会で明らかにする。
- (2) 児童・生徒実態調査を実施するとともに、「東雲授業づくりプランⅡ」の枠組みを作りあげる。

### 4年目：「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業の提言

- (1) 各教科、特別支援教育、学校保健においてグローバル時代をきりひらく資質・能力を育成する小・中学校の学びをデザインする。また、その有効性についての知見を東雲教育研究会ほかでアピールする。
- (2) 児童・生徒実態調査を実施するとともに、東雲授業づくりプランⅡを提案する。

## 引用・参考文献

中央教育審議会答申：新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について－すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために－，2014.

グリフィン，マクゴー，ケア：21世紀型スキルー学びと評価の新たなかたち－，北大路書房，2014.

グローバル人材育成推進会議：グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ），2012.

広島大学附属東雲中学校：社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅲ－大学と連携した研究開発システムの構築に向けて－，平成26年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書，37-44，2015.

広島大学附属東雲小学校：共生社会を担う子どもを育てるESDの創造－異なる価値観に気づき，互いを認め合う子どもの育成をめざして－，国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会研究指定校発表資料，2014.

広島大学附属東雲小学校：共生社会を担う子どもを育てるESDの創造－異なる価値観に気づき，互いを認め合う子どもの育成をめざして－，国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会研究指定校発表資料，2015.

広島大学附属東雲小学校：インクルーシブ教育システム構築モデル事業成果報告書，2014.

広島大学附属東雲小学校：インクルーシブ教育システム構築モデル事業成果報告書，2015.

広島大学附属東雲小学校・東雲中学校：小・中学校9年間の学びがにつながる授業づくりのあり方，東雲教育研究会実施要項，2014.

広島大学附属小学校：グローバル化社会を生き抜く子どもの育成，第96回研究発表協議会発表要項，

2015.

広島県教育委員会：広島版「学びの変革」アクション・プランーコンピテンシーの育成を目指した主体的な学びの充実ー，2014.

ジョンソン,D.W.，ジョンソン,R.T.，ホルベック,E.J.：学習の輪ー学び合いの協同教育入門ー，二瓶社，181-190，2010.

国立教育政策研究所：社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理，2013.

国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口，2012.

神戸大学附属中等教育学校：グローバルキャリア人としての資質・能力を育成する中等カリキュラムの研究と授業の創造，2014.

溝上慎一：アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換，東信堂，81-101，2014.

ライチェン，サルガニク：キー・コンピテンシーー国際標準の学力をめざしてー，明石書店，2006.

初等中等教育における国際教育推進検討会：国際社会を生きる人材を育成するために，2005.

東京学芸大学附属国際中等教育学校：東京学芸大学附属国際中等教育学校作成平成 26 年度来訪者資料，2014.